

L・G・バンジュール著

『西アフリカ紀行——ニジェール川からギニア湾まで——』

L. G. Binger, *Du Niger au Golfe de Guinée par le pays de Kong et le Mossi*,
Librairie Hachette et Cie, Paris, 1892.はら ぐち たけ ひこ
原 口 武 彦

- I はじめに
 II 本書の構成
 III 内容の紹介(第1巻)
 1. 踏査旅行の目的・出発
 2. 地誌
 おわりに

I はじめに

コート・ジボワールの首都、アビジャンからラグーン(潟湖)沿いに東へ20キロメートルほど行ったところに、バンジュールヴィル(Bingerville)という人口約5万の小さな町がある。植民地化当初、グラン・バッサム(Grand Bassam)におかれていた植民地総督府が1900年、この町に移されて以来、1934年、黄熱病の流行のため再びアビジャンに移されるまで、バンジュールヴィルは仏領コート・ジボワールの首都であった。この町の名、バンジュールヴィルは、これから紹介する『西アフリカ紀行』の著者L・G・バンジュール(L. G. Binger)にちなんで名づけられたものである。ザイルにおいてスタンレーが、スタンレーヴィル(Stanleyville=現在のキザンガニKisangani)という町の名によって植民地史上にその名をとどめていたように、フランスの西アフリカ植民地化の過程においては、バンジュールの踏査旅行の果たした功績がフランスにおいて高く評価されていたことの証左である。そしてその探険の記録が、ここに紹介する『西アフリカ紀行』である。原題を直訳すれば「ニジェール川からギニア湾まで——コンゴ国、モシを經由して——」(*Du Niger au Golfe de Guinée par le pays de Kong et le Mossi*)であるが、ここでは簡単化のために『西アフリカ紀行』と呼んでおく。

本書は、B5版、全2巻、第1巻509ページ、第2巻416ペ

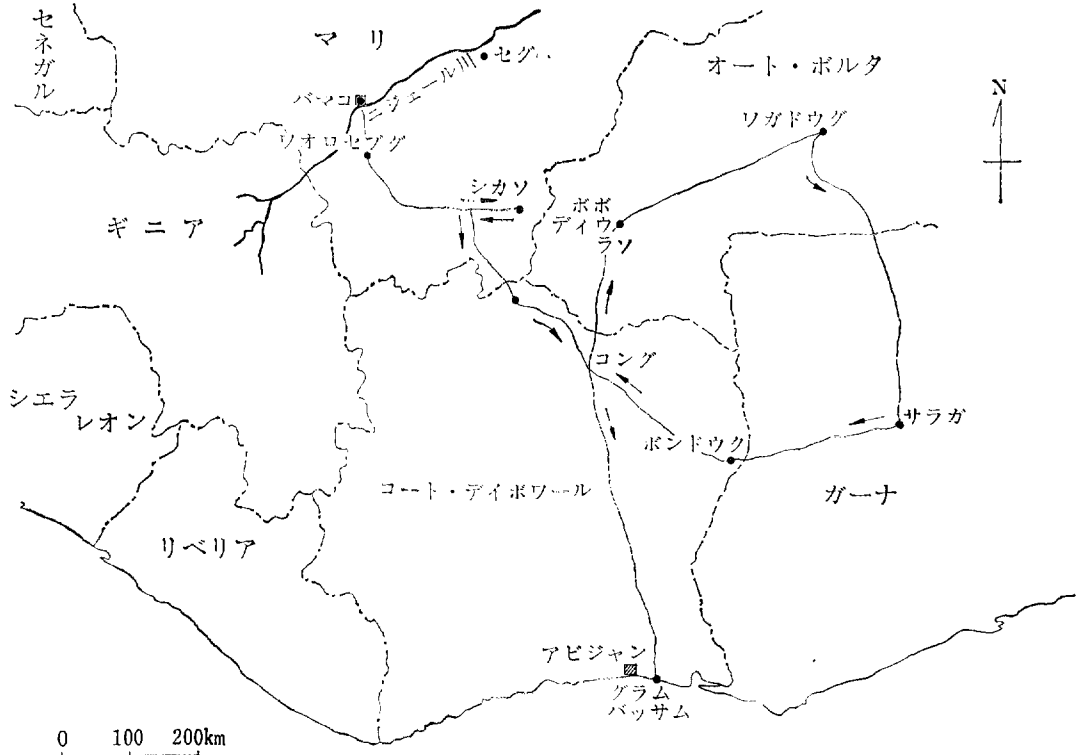
ージからなる大著である。全体の構成は、一応、旅行記風の体裁をもっているが、その内容の素材的な価値もさることながら、著者の鋭い観察眼、見聞の詳細で正確な記述によって、一個の研究書といってよい風格をそなえている。事実、近年出版されている旧仏領西アフリカのいわゆる伝統的社会、あるいは19世紀末の植民地化前後の状況に関する研究書で、本書の名がその文献リストにのっていないものは皆無といってよい。西アフリカ史研究にとって欠くことのできない基本的文献の一つとなっている。また本書には総計176枚の木版画の挿絵がところどころに挿入され叙述を補っている。きわめて精緻で写実的な1色刷りのこの木版画は、それ自体、当時のこの地域の状況を知る上で貴重な資料となっている。リュ(Riou)氏の作品であると記されているだけで、そのリュ氏がどのような人物で著者バンジュールとどのような関係にあったのかということについては明らかでない。

なおこの書物は日本では私の知るかぎり天理大学図書館に1部所蔵されているだけである。アジア経済研究所には、全2巻の本書の内容を144ページにまとめて1891年、*Le Tour du Monde* 誌に掲載されたもののマイクロ・フィッシュが保管されている。本稿執筆に際しては、天理大学図書館所蔵のものを利用させていただいた。ここにあらかじめ記して謝意としたい。

II 本書の構成

本書は16の章と「結論」からなる本文(第1巻は第9章まで)と、「付録」として踏査地域の地形、気候、動植物相に関するデータ、踏査隊の組織、経費の明細、ソンガイ王国の国王の系図など五つの資料が、バンジュール自身が作成した90万分の1の西アフリカ地図とともに付されている。

第1図 バンジュールの踏査ルート



この地図には、バンジエールが踏査したルートが書き入れられているが、それを縮小、単純化したものが第1図である。当時、すでにダカールからバマコまでのルートは、フランスの支配下に入っていたから、本来の意味でバンジエールが踏査したルートは、バマコを起点とし東方に向かいコング (Kong) に達し、そこからオート・ボルタのワガドウグウまで北進し、再び南下してコングでコート・ジボワールのグラン・バッサムから密林地帯を通過して北上してきたトレッシュ・ラプレーン (Treich-Laplane) の一行と合流し南下してグラン・バッサムにいたるまでである。バンジエールがこの踏査旅行に要した日数は、ボルドー港出発が1887年2月20日のことであり任務を完了してマルセーユ港に帰着したのが1889年5月11日であったというから、実に2年3カ月におよぶ大踏査旅行であったわけである。

本書はこの長期の大踏査旅行の見聞を大体、バンジエ

ールの旅程に沿って旅行記風に綴っている。16の章には章ごとのタイトルはないが、その内容については「目次」と各章の冒頭に「調査の目的」、「コング到着」といったような小みだしが羅列して示されている。それらは、第1章の冒頭が「調査の目的」で始まり、第16章の末尾は「フランスへの帰国」をもって終わっている。

本稿では紙数の関係もあり、第2巻に関する紹介は別の機会に譲り、第1巻に限りその中から、「踏査旅行の目的・出発」と「ウォロゼブグ (Ouoroséhougou) 村」、「サモリ帝国」、「コング国」の三つの地誌的主题に関する部分を要約、紹介することにする。

III 内容の紹介 (第1巻)

1. 踏査旅行の目的・出発

「ヨーロッパの列強のすべてが、アフリカ大陸を手中

に収めようとねらっており、毎日のように、アフリカ大陸におきた種々の出来事についての話が伝えられているときに、仏領セネガル、仏領スーダン（引用者注——現在のマリ国）にすでに2度にわたって滞在した経験をもつ1人の陸戦隊士官（un officier d'Infanterie）にとって、ヨーロッパ諸国のアフリカ占領に無関心であること、そしてそれに心を動かすことなくそれらのことを記録することだけで満足しているということは、困難なことであつたらう。

フランスはこの大陸においてはもともと他の列強に先んじていたのである。それらの競争相手に追い越されてはならない。」（p. 1）。

本書の冒頭は以上のような書き出しで始まっている。当時の西アフリカは沿岸部に関しては、ヨーロッパ列強の勢力圏はすでにほぼ確定していたが、内陸部に関してはヨーロッパ人にとっては前人未踏の地域が多く、不確定な要素が大きかった。ベルリン会議直後のヨーロッパという時代的雰囲気の中で、この前人未踏の地域探険の夢が野心に満ちた若き海軍士官の胸中に、はぐくまれていったのはごく当然のことといえよう。このバンジュールの夢が現実になえられる直接の契機となったのは、バンジュールがフェデルブ（Faideherb）将軍の部下として配属されたことであつた。この著名な、かつてのセネガル総督フェデルブは、バンジュールの計画を知り勇気づけた。そしてこのフェデルブの推挙により、バンジュールは「ニジュール川彎曲地域の地理的踏査」と「仏領スーダンの諸基地をギニア湾に連結させるという政治的任務」を当時の外務大臣フルーランス（Flourers）より命じられる。1886年末のことであつた。

早速、出発の準備にとりかかったバンジュールは翌87年2月20日にはすでにボルドー港を出発している。2月28日、ダカール港到着、ただちに汽車でサン・ルイ（Saint-Louis）まで行き、そこから小船に曳かせた平底船でセネガル川をのぼり4月10日、バケル（Bakel）に到着する。ここにはバケル軍区のフランス軍基地があり、ここでバンジュールは、18頭のロバを土地の商人から、武器とギネ布地（注1）と交換に調達する。若干の人足も雇い入れる。4月21日、バケルを出発、陸路、メディン（Médine）、ケイエ（Kayes）を経て6月21日にバマコに到着する。ボルドー港出発からここまでですでに4カ月を要したわけである。

ケイエでは、仏領スーダンの最高指令官、ガリエニ（Gallieni）中佐の出迎えをうけ、ここでバンジュールは

踏査旅行に役立たせるため2種領の紹介状を同中佐からもらう。

そのうちの一つは、当時、バンジュールが踏査する予定の地域一円に勢力を有していたサモリ（後述）宛にアラビア語で書かれたものである。

「この書簡の携行者は、コングおよびその近隣の諸国——それらの国々については、あなたはペロ（Peroz）大尉に多くの情報を提供した——を訪問するために、フランスの大首長（le grand chef de Français）によって派遣されたフランス軍士官である。

バンジュール氏は、この土地の産物を研究し、わが国の商人たちがコングとその近隣の諸国の住民と交易するためにバマコにどのような商品をもって来るべきかを検討する任務を帯びている。……」（p. 9）

他の一つは「ニジュール川対岸に存在するすべての国々にの王（rois）、首長（chef）」に宛てたものである。

「あなたを訪問したものは、1人の友人である。彼は、和平と親善のための話し合いしか行なわない。フランスがニジュール川岸のバマコに商館を開設したことは、あなたもご存知のことであろう。われわれは、あなたがたと知りあいになり友好的な通商関係をとりかわしたいというわれわれの希望をあなたがたに伝えるために、あなたのもとに使節を派遣しようと決意した。

バケルからバマコにいたる全地域のフランス人首長である私は、あなたを訪問しようとしているバンジュール中尉をここに紹介する。……」（p. 9）

(4) バマコ

6月21日、バマコに到着したバンジュールは、ここでいよいよこれから始まる本格的な踏査旅行の最終的な装備を整える。

バンジュールの踏査隊は、バンジュールを含めて14人、ろば18頭でバンジュール以外はすべてアフリカ人であつた。その内訳は、ろばひき10人、コック1人、馬丁兼召使1人、それにかつてバンジュールが仏領スーダンに滞在していたときの召使だったディアウエ（Diawé）が、随員頭格で加わつた。馬丁兼召使のムサ・ディアワラ（Mouça Diawara）も、かつてバンジュールが使っていた馬丁であつた。コックとディアウエ、ディアワラの3人は猟銃などを携行していたが、10人のろばひきは全く武装していなかつた（p. 29）。

バンジュールは、最終的に踏査ルートを決定するために、バマコ滞在中にニジュール川右岸の諸国についての情報を可能なかぎり収集する。それらによると、

1) セグ (Ségou) のサルタン、アフマドウ (Ahmadou) は、ガリエニ中佐との間に保護領条約を締結した。アフマドウの息子マダネ (Madané) は、セグー—シコロ間を支配しており、かつてのセグーの王、アリ・ディアラ (Ali Diara) の兄弟カラモコ・ディアラ (Karamokho Diara) の率いるバンバラ族軍と戦闘状態にある。

2) 同様にサモリも自己の支配下にある諸国 (Etats) をフランスの保護のもとにおくことをとりきめた条約に調印した。サモリとその兄弟たち、そしてサモリの息子カラモコ (Karamokho) は、バゴエ (Bagoé) 川右岸のケネドウグウ (KénéDougou) およびガナドウグウ (Ganadougou) の首長ティエバ (Tiéba) と戦闘状態にある。

このような情報からバンジェールはつぎのような結論をくだす。

すなわちフランスは、これまでセグーのトゥクルール (Toucouleur) 族に対して常にバンバラ側を支持してきたので、フランスが彼らの敵であるトゥクルール族、つまりアフマドウと条約を締結したことを知れば、バンバラ族は自分の通行を拒否するかもしれない。他方、サモリとフランスは現在のところきわめて友好的な関係にある (pp. 10~11)。

以上のような情勢分析にもとづいてバンジェールは、サモリの支配地域を通過してコングに到達するルートを選ぶことに決定する。しかし、のちに述べるようにこのルートによる踏査旅行は、サモリのあいまいな態度のために期待したほど円滑に進行せず、バマコの南約90キロメートルのウオロゼブグ (Ouolósébougou) でバンジェールは足どめされ、1度、バマコにひき返さざるをえなはいはめに陥る。

(a) バマコ出発、ニジェール川渡河

バマコ到着から10日目の6月30日早朝、バンジェール一行は、バマコを出発しカヌーに分乗してニジェール川を渡った。

カヌーは、マホガニー材製、全長9~10メートル、積載量は1000キログラムぐらいのものであった。ろばは、1隻に3頭ずつ1頭に人夫を1人ずつつけて乗せた。この季節、川幅は750メートルで流れが早く渡河に要する時間は15分ぐらいであった。各カヌーには、船先と艫にそれぞれ1人ずつ2人の船頭がのりこみ、爪竿と櫂でカヌーを操る。渡河に対しては、ソモノ (Somono) 族^{注2)}の首長が、荷を積んだらば1頭につき、2フラン50、荷を積んだ牛については1頭につき5フランの通行料を徴収する。人間は無料である。いずれも貝貨 (cauries) で

支払うことができる。この収入は以下のように分配される。バマコの首長ティティ (Titi) が3分の1、ソモノ族首長とカヌーの所有者が3分の1、残りの3分の1はソモノ族全体の収入とされる。バンジェールは、ヨーロッパ人であるということで通行税を免除されたが、カヌーの船頭たちに10フラン^(註3)の心づけを与えたとバンジェールは記している (p. 13)。

2. 地誌

(1) ウオロゼブグ村

(i) ウオロゼブグ村到着

ニジェール川を渡ったバンジェール一行は南進して7月5日には、バマコから約90キロメートルのウオロゼブグ村に到着した。バンジェールは、すでに彼の到来を予知していたサモリの代官ドウグウクナシギ (dougoukounasigui) であるフネ・マムル (Founé Mamurou) の出迎えをうける。彼は、マリケ族の出身であった。バンジェールの宿泊所として提供された小屋 (case) の一角には、14戸の小屋があったがそこにはわずかに6人が2戸に住んでいるだけで、12戸の小屋は無人かあるいはすでに廃家のような状態になっていた。この村にくる途中でも、バンジェールは廃墟と化した数多くの村々 (その名をあげているものだけで10カ村をこえる) を通過している。現存する村々もかなり荒廃しているさまが描かれている。バンジェールによれば、この地方はサモリの侵略を受け、その支配下に入ってから6分の5の住民が難をのがれてこの地を去ったという (p. 19)。

サモリに関するバンジェールのこのような記述は、のちにみるようにバンジェールがサモリに対して好感をもっていなかっただけに、ある程度、割引きして理解することが必要であるかもしれないが、しかしサモリの侵略によってこの地方が当時かなり荒廃した状態にあったことは事実のようである。

バンジェールはウオロゼブグ村に到着してまもなくこの地方の4人の有力者の訪問をうける。

第1に、カリ・シディベ (Kali Sidibé)。彼はフラバ (Furaba)、ティアカ (Tiaka) の首長であり、この地方を支配している。

第2は、ムピエブグラ (Mpiebougoula) の首長、ファギンムバ (Faguimba)。彼はサモリの妻の1人の親族で、サモリの息子カラモコが渡仏したとき、サン・ルイまで彼に随行したという。

第3は、セグーのトゥクルール族のシェリフ (cherif) 「アラビア語の読み書きが少々できることによって」こ

の地方では賢人とみなされている。

最後に、テンゲレ (Tenguélé) のアルマミ (almamy) (註4)、かつてはワスル (ouassoulu) を支配していた。

バンジュールは、彼らとの会見の様態をその場面を描いた挿絵をそえて次のように記している。

「カリは、馬に乗り小ギャロップでやってきた。彼の乗馬ぶりはみごとであった。彼の馬は小さかったが活力に満ちていた。彼のうしろには26人の歩兵隊が隊伍をととのえず一団となって走ってきた。彼らは左肩に銃をかつぎ、手には剣をもっていた。カリは、私(バンジュール)の前までくると突如として馬をとめ、剣を天高く差し上げた。彼の24人の兵士が、猛獣のような叫び声をあげて空に向けて礼砲を打った。彼らは、1人だけギネ布地のズボンを着用している者がいたが、他の者は軍服を着ていなかった。幾人かの者は刀を赤い羊毛の綱でつるしていた。彼らはかつては白かったであろうが、今はうす汚れたドロケ (Doroké) (註5)をまとい、頭にはさまざまな色と形のずきんをかぶっていた。中にはずきんをかぶっていない者もいたが、それらの者は独特な髪型をしていた。サモリの兵士、グリオ(註6)、捕虜たちはすべて次のような髪型をしていた。頭の頂点のところだけ残して前頭部を剃りあげ、その頂点はおまもりをつけて飾る。頭の両側とうなじには剃り残した髪で房をつくり、これで正規の髪型は完成する。

これらの兵士の中には、15～16歳の少年たちがいた。彼らの多数を占めていたといつてよいだろう。結局、私が見たものは、一種の徒党 (bande) であった。しかし、彼らは、女・子供を恐怖させ、無防備の男たちを捕虜にするには十分であったろう。」(p. 20)。

一通りの儀式が終わると、人びとはカリをとり囲んで半円型に腰をおろし、カリとバンジュールの会談が始まる。カリは、バンジュールが単独で医師も伴わずに旅行していることを知り驚く。バンジュールは、カリに自分の旅行の主旨を説明し、サモリ宛の紹介状を持参していること、そしてこの紹介状をできるだけ早くサモリのもとに届け、自分自身はテヌトウ (Ténetou) までさらに前進し、そこでサモリからの返事を待ちたい旨を伝える。カリらは、30分ばかり座をはずして協議したのちもどってき、バンジュールからサモリ宛の紹介状を受け取り、シェリフに読ませる。彼は、その文面を転写したのち、封筒にもどしバンジュールの目の前で飛脚にそれを手渡した。そしてカリはバンジュールにテヌトウに向けて出発せず、遅くとも20日あればもどってくるであろう

サモリからの返事を、このウオロゼブグ村に滞在して待つように要請する。これを聞いて、バンジュールは自分がすでに軟禁状態におとし入れられているものと感じ、この要請を受け入れる。

結局、サモリからの返事は、1カ月を経てもバンジュールのもとに届かず、彼はいったんバマコに引き返すことになるのだが、この1カ月あまりのウオロゼブグ村滞在を無為に過ごすことなく、この地での見聞を詳細に記録している。

(ii) ウオロゼブグ村の住民

ウオロゼブグ村は、相互に1キロメートルばかり離れた三つの集落、本来のウオロゼブグ、テヌトウブグバ (Tenetoubougoula)、デビブグ (Daibibougou) の総称である。これら三つの集落の人口は、それぞれ150人、150人、40人で計340人、住民はすべてパンバラ系サマンケ (Samanké) 人であった。このほかに、ここが南北の通商路にあたり、市場があるために常時80人の商人と120人の捕虜が滞在していた。かつてはもっと栄えていたと思われるが、バンジュールが訪れた時点では、これらの集落は一様にみじめな様相を呈していた。とくにダビブグは廢墟同様の状態でおそらく3～4家族40人しか住んでいなかった。総じて5戸の小屋 (case) に1戸の割合しか人が居住していなかった。道路も汚れていた。バンジュールは、自分の宿泊のために提供された土づくりの小屋の汚さに閉口している。白いウジがいたるところにわいていた。このウジがわくのは、この土地には良質の粘土が存在せず、村内の土を使用しているためであるという。その土はすでに腐蝕しているからである。

住民の悲惨な状態を示すエピソードとして、バンジュールは次のような経験を書きとめている。

ある日、召使いの1人がバンジュールに、自分の赤子を溺死させた母親を目撃したと語った。バンジュールは、そのことを信用できずフネ・マムル(この村に常駐するサモリの代官、ドウグウクナシギ、前出)に会いに行き、彼女がとがめられている罪を本当に犯したのかと尋ねる。彼はバンジュールをその婦人が閉じこめられている小屋に案内する。彼女はバンジュールにつぎのように語ったという。「私は食べる物がなく、乳もでない。私は子供が飢え苦しんでいるのを見るのが耐えられなかった。それはあまりの苦痛です。もし、人びとが私を殺さないなら、私も身投げしたい。」(p. 26)

(iii) ウオロゼブグの大市

ウオロゼブグ村には、毎日開かれる常設市と週1回金

資 料

品 目	量	単 価		
		単 位	貝 価	フ ラ ン
ミ 50kg	1ムル(maule=2.5ℓ)	1バ(ha)	2.50	
レ 20 "	"	"	"	
ツ 10 "	"	"	"	
ト 2~300 "	1塊(25kg)	31バ	77.50	
セ (cé) 油	50 "	2ケメ(kémé)	0.50	
山 7~8頭	1頭	12バ	30.00	
羊 7~8 "	"	15バ	37.50	
に わ と り	6~7羽	1羽	1バ4ケメ	
牛 2頭	1頭	68バ	170.00	
ろ 2 "	1 "	48バ	120.00	
単 発 式 火 打 ち 石 銃 ⁽¹⁾	6丁	1丁	15バ	
コ ヲ (koyo 幅10cm)		1片(66cm)	1ケメ	
火 打 ち 石	9個	1個	1ケメ	
針 25本	1本	40コリ(cauries)	0.10	
青 色 ギ ネ 綿 布	2反	1腕尺(50cm)	3ケメ	
		15mもの	9バ	
英 国 製 キ ャ ラ コ (粗 悪 品)	1反	15m	11バ	
イ ア ラ プ ズ ⁽²⁾	2個	1個	5バ	
鐵 2丁	1個	1丁	6ケメ	
土 3個	1個	6ケメ	1.50	
ナ 4本	1本	3ケメ	0.75	
木 製 イ 腰	5脚	4ケメ	1.00	
小 製 か ら 帽	6個	1脚	6ケメ	
麦 わ から 子	6個	1個	6ケメ	
そ の 他 に ウ ル (ourou コーラの 実)				
製 籠 用 の バ ー ム の 束				
バ 一 ル (粗 悪 品)				
焼 い た 牛 皮 の 1 片				
凝 結 し た 血 の 塊				
ビ ー マ ン ・ 香 味 料 , 玉 ね ぎ 等				

大きき品質によ
って価格が異な
る。

(注) (1) 現地産の白地の綿布。(2) dialabougou=現地産布地製ターバン。

曜日に開かれる大市があった。テヌトウブグ村には小さな常設市があり、馬の取引が行なわれていた。

パンジェールは、ウオロゼブグ村の大市の際、そこに展示されている商品の量と価格を詳細に記録している。それによると、上表のような商品が売られていた。

これらの商品のうち、小物はよく売れセ(cé)油(註7)、コーラの実などは大部分、その日のうちに売れてしまう。しかし家畜類・ろば、銃、布地などは、1日2~3頭の家畜、銃1丁、ギネ綿布数反が売れる程度である。

小家畜はセグーから運ばれてくる。牛・ろばは運搬で、やりくりし窮した商人たちが売りに出す。銃はいずれもベルギー製で、安手の白キヤラコとともにシエラ・レオン経由でこの地に流入してくる。藍染めギネ布地だけが、メデイン経由で入ってくる。馬と塩は、北部のベレドウグ(BéléDougou)、バナムバ(Banamba)、トウバ(Touba)、ソコロ(Sokolo)、ゴムブ(Gombou)から、バマコを経てこの地に入ってくる。馬の買手は、サモリ軍だけでありテヌトウブグラ村の市場で、捕虜8~9人と

交換されていたとパンジェールは記している。

この地方では貝貨が流通し、価格の単位ともなっている。コリ(caurie)80個の単位を1ケメ(kémé)といい、80コリすなわち10ケメを1バ(ba)という。2バすなわち160コリが銀貨5フランで交換される。当時のフランの貨幣価値は、今日のフランのおよそ2~3倍として、当時の1フランは邦貨換算140~210円といったところだろうか。とすると米は2.5リットルで350~525円とかなり高い。とくに塩が1キログラムあたり3.1フラン=420~630円ときわめて高価な商品であったことが知られる。事実、この塩塊は貝貨と同様に貨幣単位として用いられていた(pp. 27~28)。

(二) 商人の種類

パンジェールは、このスーダン地方で活動している商人たちの種類について次のように述べている。

1) 一時的な商人

職業的な商人ではない。婚資をかせぐため、自分の土地を耕作させる人間を雇用する資金を得るため、あるい

は自分の村で安楽な生活を送るために、その必要が生じたとき2~3回、行商の旅にでるだけである。取り扱う商品も塩、ギネ布地、コーラの実などに限られている。

2) ココロコ (kokoroko)

彼らは一般にワスル (Ouassoulou) あるいはウオロコロ (Ouorocolo) のヌム (noumou=鍛冶屋) である。陶器、木製品、鉄製品、細工品を製作しそれを貝貨と交換に売ることから始める。かつて彼らはケニエララ (kéniéla=預言者) の役割も果たしていたといわれる。彼らは数千の貝貨 (8000として25フラン、今日の邦貨に換算して5000円ぐらいのものか?) を蓄積すると、コーラの市場——サカラ (Sakhala)、カニ (Kani)、テンテ (Tenté) など——に赴きコーラの実を仕入れ、そこから300~400キロメートル北にある市場——主にこのウオロゼブグ、テヌトウ、カンガレ (Kangaré)、コナ (Kona) など——までそれを運び、そこでわずかな利幅で塩と交換に売る。そしてその塩を頭上にのせて再びコーラの市場まで運ぶ。

彼らは専門的な商人だが、次に述べるディウラ (Dioula)、と呼ばれるコング地方を中心に活動しているマンデ (Mandé) 系の商人ほど活動的ではない。ココロコというと、大きな取引を行なうことのない貧しい商人の姿が思い浮かぶという。

3) 次に本格的な商人がいる。1年のうち7~8カ月、旅をしていることをいとわない。マンデ族ではディウラ、ハウサ (Hausa)、ダゴムバ (Dagonba) 族ではマラバ (marraba) と呼ばれている商人たちである。この種の商人は、長期の大旅行をし、各地の王、首長らを相手に、戦争捕虜と交換に武器、糧食などを売る。そしてときには、沿岸まで出かけて、あるいはメディンに開設されているフランスの商館で買い求めた美しい布地などの高価な物品を王や首長に贈る。彼らは各地に妻をもっている。そしてある者は、ジェンネ (Djenné)、セゲー (Ségué)、バナンバ (Banamba)、ブラ (Bla)、ゴング (Kong) のような交易中心地に本拠をおき、有力な商人になる。ウオロドゥグ (Ouorodougou) に本拠をおきコーラの取り引きを独占している者もある。しかしすべてがこのような成功者というわけではなく前記のココロコと同じように、頭上に商品をのせて行商しているものも多い。ただし、彼らはココロコのように塩、コーラの実などに特化していることはない。

4) 最後にモール人商人がいる。フランス領内にいるモール人商人の場合はほとんど自分が旅に出ることはな

い。ゼグ、ナミナ (Namina)、バマコなどに店をもち、商売は自分の奴隷たちにまかせて、自分は安楽に暮らしている。ベレドゥグ (Bélédougou)、カアルタ (Kaarta) の北部に、本拠をおいているもの場合には事情が異なり、自らティシイト (Tichit) (註8) まで塩を仕入れに行き、あるいは捕虜を売るためにはるかモロッコまで旅をすることもある (pp. 30~32)。

(四) 護送隊

バンジュールがウオロゼブグに滞在してサモリの返事を待っているとき、サモリは、ウオロゼブグ村の東方約300キロメートルの地点にあるシカソ (Sikasso) の戦場で、ティエバ族と交戦中であった。このサモリ軍のために糧食を運ぶ護送隊が、たまたまバンジュールが滞在中にウオロゼブグ村を通過した。

バンジュールの記録によれば、その護送隊は62人の荷役人夫からなり、ブグラ (Bougoula) から、シカソに向かう途次にあった。護送隊には、女、子供も含まれていた。彼らが運んでいる荷の中味は次のようなものであった。

- 1) ミレット52フフ (foufou=樹皮の繊維で編んだかご、中に大きな葉をしいて中味がこぼれないようにしてある。1個にミレット約10~15キログラム) 計約800キログラム
- 2) 米、9フフ計約100キログラム
- 3) netté (註9) 2コ 25キログラム
- 4) 火薬、3ドウンドウン (doundoun) 900キログラム (註10)

ドウンドウンというのは、バンバラ製の火薬をつめる木製の容器で8~10キログラムの火薬を入れることができる。これらの荷とは別に、荷役人夫たちは、3~4キログラムのとうもろこしの入った袋もっている。それは、往復25~30日を要するブグラからシカソまでの旅の途中の自分たちの食糧であった。このような護送隊を組織し派遣する世話をやくのは、各地に駐在しているサモリの代官、ドウグウクナシイギイ (dougoukounasigui) である (p. 33)。

(五) バマコ帰還

以上にその一部を紹介したような見聞を続けながらバンジュールは、ウオロゼブグ村に滞在してサモリの返事がくるのを待っていたがいつにその気配がない。

7月22日 (バンジュールのウオロゼブグ村滞在17日目)、たまたま盗人の処刑に立ち合うためファラバからやってきたカリに会い、サモリからの返事について、バンジエ

ールは問いたです。間もなく到着するだろうというカリをさらに詰問すると、こんどは「パゴエ川の水量が増加しており、飛脚の馬がワニに喰われた。」と答える。結局、その答えは要領を得ず、やむをえずバンジュールはなお数日、待つことにする。

7月27日、バンジュールの料理人、ムサが、戦場から馬を買うためにもどってきたサモリの兵士がドウグウクナシギとソリ (Sory) (註11) に対して次のような話をしての盗み聞きしてくる。

「シカソでは) 毎日のように戦闘が続いている。多くの人びとが餓死している。しかし、それも今や終わり、雨期が終わるまでにはティエバに勝つだろう。われわれはまた、この村に白人が滞在していることを知った。サモリは、この国で彼に会うことを望んでいない。……」(p. 40)

この日からドウグウクナシギのフネ・マムルとソリのバンジュールに対する態度が「無関心からほぼ敵対といつてよいものになった」。夜にはバンジュールの脱出を警戒して彼の宿舎のまわりに見張りが置かれるようになる。バンジュールの部下たちも不安を感じるようになる。人足頭のディアウエは「われわれは1日も早くここを立ち去るべきである。でないとみな殺されてしまう。」と訴える。

このような緊迫した状況におかれているとき、バンジュールは1人のココロコ (小商人——前出) が数日前からバンジュールの小屋を足しげく訪れるようになったことに気づく。このココロコは、ケニエララ (占い師——前出) もかねていた。バンジュールは、このココロコがバンジュールに、何かを告げようとしていることに気づき、彼に占いを依頼する。彼の小屋に入ると、ココロコはまずケニエ (Kénié=砂、占いに用いる) によって告げられることを口外しないことをバンジュールに約束させる。

砂とコーラの実を操ってココロコはバンジュールの未来を占いはじめる。そこでバンジュールに告げられたのは、次のようなことであった。

「サモリは手紙を1週間後には受け取った。彼は、お前がシカソに来ることを望んでいないが、かといって白人を不快にさせることも欲していない。そこでサモリはあなたを待たせておくようにと答えた。おそらくしばらくすれば、彼はあなたの通行を許すだろう」。バマコに引き返すことについては、「白人が出発したのち、もう1人の飛脚が到着するだろう。しかしあなたは出発すべき

である」(p. 42)。

かくして、バンジュールはバマコにいったんひき返す決意をし、カリにそのことを告げ同意を求める。だが交渉はなかなか立ちあかない。そこでバンジュールは、一方的に次のように宣言して別れる。「私は、明朝、出発することをあなたに通告する。もしあなたがそれに同意できないというなら、あなたは私に銃の引き金をひかせることになるう」(p. 43)。1時間後、カリは戻ってきてバンジュールに告げる。「あなたはそんなことをしないでよい。私はあなたの友人であることを示すために、マカナ (Makhana) まで馬であなたに同行しよう。そしてサモリからの返事が到着したら、私が自分でその手紙をバマコのあなたのもとに届けに行くだろう」(p. 44)。

結局、バンジュールは8月10日早朝、ウオロゼブグを出発、15日朝には無事、バマコに帰りつく。ウオロゼブグには1カ月あまり滞在していたわけである (pp. 43~44)。

バンジュールの通行許可をめぐるバンジュールとサモリ側の交渉の経過の記述は、バンジュールが交渉の一方の当事者だけに客観性を欠くおそれがあるが、それでも終局的な段階ではかなり緊迫した状況の中で、わずかに90キロメートルのバマコにはフランス軍が駐屯しているとはいえ、バンジュールの強気な交渉は、彼の非凡な政治力を示しているものといえよう。またその過程でのケニエララの果たした役割は興味深いものがある。おそらくケニエララの預言は、サモリ側が用意した一つの外交手段であったのではなからうか。そしてバンジュールもそのことにある程度、気づいていたようでもある。そのような相手側の方法を正しく理解しえたことも、バンジュールのすぐれた外交的資質を示すものであったといえよう。

(b) サモリの返書

バンジュールがバマコに帰着してまもなく、それを追いかけるようにサモリ軍の1兵士がサモリの返書を携えてバマコに到着した。アラビア語で書かれた返書の内容は、およそつぎのようなものであった。「私は、バマコから来た一キリスト教徒が私に会見することを要請していることを知った。もちろん、私の意志は彼の友人であることである。私は彼の話を聞きたいのでシカソの陣地まで来てもらいたい。道は彼に開放されており、人びとは彼が私に会いに来るのを援助するだろう。私は、喜びに満ちあふれている。なぜならわれわれとフランス人の間には深い友情が存在するからであり、私はわれわれの

同盟に満足している……」(p. 45)。

他方のセグ経由のルートは、ベレドゥグがセグのトゥクルール族と交戦状態にあり、情勢はかんばしくないのを知ったバンジェールは、この通行許可の返書が到着すると、早速また同じルートでシカソに向かうことに決定する。

9月3日、再びニジェール川を渡り8日にはウオロゼブグに到着する。住民の応待は、前回よりもはるかに友好的であったという。

(2) サモリ帝国 (註12)

(4) サモリとの会見

バンジェールは、1887年9月26日、シカソのサモリ軍の陣地に到着し、サモリ・トゥレ (Samory Touré) に会見している。そのときのサモリの印象を、バンジェールは次のように記している。

「サモリは50歳ぐらいの堂々とした体躯の端正な顔立ちの男であった。その表情はけわしく、この人種の人にしては珍しく鼻が細く長く、それが全体に繊細な印象を与えている。彼の目は落ち着かずたえず動き、話相手をまともに見ていないことが多い。人が讃辞を述べているときは注意深く耳を傾けているが、自分がはっきり答えたくないような質問には、うわの空で無関心を装う。彼は能弁であり、必要があれば熱烈な説得的な弁舌を振る能力を持っているように思われる。

彼の息子(カラモコ)が彼のためにパリから持ち帰った青と白の縞の綿のハンモックの上に坐り、手のひらが癩病 (ladre) におかされている手に木の切れはし——バンバラ語でニエンドシラ (niendossila), またはングオッセ (ngossé), フロフ語でソチウ (sotiou) と呼んでいるもの——を持ち歯をみがいていた。

彼は葵の花模様を施した粗悪品のドロケ (doroke=アラブ人の着るだぶだぶの上衣) をまとい、ヨーロッパ製の赤黒の縞の綿布で作った現地風のズボンを履いていた。顔の色より明るいチョコレート色の手足には、セ製のバターを塗っていた。足には赤皮の現地風のバブウシュ (babouche=トルコ・スリッパ) を履いていた。

頭には、歩兵隊の赤色のシェシア帽をかぶり、そのまわりから口元にかけて黒い顔のまわりを薄い白色のターバンでおおっていた。両肩には、安手のハイク (haik=アラブ人女性が着物の上にまとう布) を無造作にかけていた」(p. 89)。

(5) サモリ軍

バンジェールは、サモリ軍の陣地にわずかのべ5日間、

滞在しただけであったが——サモリは敵にフランス軍の援護があることを印象づけるために、しばらくバンジェールがサモリの陣地に滞在するようにひきとめたが、バンジェールはこれを固辞した——、その間にサモリの陣地内をくまなく観察し、その見聞を記録している。

サモリ軍の陣地は、シカソの西方、約2キロメートルの地点にあり、シカソに面して南北に長く一列に、大小11個のディアサ (diassa=陣屋) が配置されていた。バンジェールの推計によれば、サモリ軍の兵力は約5000(註13)、その内訳は次のとおりである。

大ディアサ(兵力6000人)×7	4200人
小ディアサ(兵力100人)×4	400人
哨戒所	50人
サモリの近衛兵	50人
	計 4700人

このうち、騎兵はサモリや、隊長たちを含めて140人であった。この約5000人の兵士のほかに、各ディアサにはこれとほぼ同数の非戦闘要員——女、子供、奴隸、鍛冶屋——などが滞在していた。

バンジェールはサモリ軍の装備についても点検し、この軍隊が必要とする火薬を調達するために、サモリは毎月、約800人の捕虜を売らなければならなかったろうと推計している。しかし、これはバンジェールの計算違いで、彼の推計方法によれば80人になるはずである。すなわち、バンジェールは5000人の兵士が週に5発、弾を打つとして週2万5000発、週1000キログラムの火薬を必要とすると記しているが、それでは1発に火薬0.04キログラム、すなわち40グラムを装填することになり、黒色火薬であったにしても多すぎる。これはおそらく4グラムの間違いではなからうか。この数字を基礎に計算すると週100キログラム、サモリがテイエバ軍と戦闘を続けていた18カ月間に、少なくとも7200キログラムの火薬を消費したことになる。この火薬を調達するためにサモリが提供しうるものは奴隸しかなく、当時、奴隸1人の相場は火薬4~6キログラム(子供の場合は2~3キログラム)であったというから、1人5キログラムとしてサモリは18カ月間で、それでも実に1440人(バンジェールは1万4400人と書いている)、1カ月平均80人の奴隸を売り渡さねばならなかったということである。そのほかに、サモリ軍は150頭の馬を常備していたが、この馬の購入にも大量の奴隸を必要とした。当時、馬はもっとも安い相場でも奴隸8人であったという(pp. 97~100)。

サモリ軍には隊編成の明確な原理はなく、兵士の位階

も必ずしも明確に定められてはいなかったが、次のような兵士の範疇が存在していたとパンジェールは述べている。

1) ビラコロ (bilakoro)——初年兵、幼年兵のことで、兵服のズボンも着用していない。

2) クルシティギ (Kourousitigui) ——ビラコロに比較して壮年の既婚の兵士のことで、一時的に兵役に服しているもので職業的、専門的な軍人ではない。

3) ソファ (Sofa)——数回の戦闘を経験したビラコロは、ソファになりズボンを着用するようになる。サモリの信任を得れば、村々の駐屯隊長になる場合もある。たまたまドウグウクナシギ (dougoukounasigui 前出) として、地方行政を委ねられることもある。ソファとはもともと、馬丁の意味であった。

4) ソファコング (Sofakong)——ソファの長のことで、とくに戦功のあったソファは、その報酬としてケレティギ (後述) から若干名の兵士をまかさされ、指揮をとるようになる。

5) ケレティギ (Kélétigui) または、コンティギ (Kontigui)——ケレティギは平時には一定の領土の統治にあたり、戦時には領内の兵士を動員して戦場に赴く。シカソの陣地の各陣屋の長は、このケレティギ、またはコンティギであった。その中にはサモリの兄弟、息子たちも含まれていた (pp. 103~104)。

隊によっては隊旗を有している部隊もあったが、それはキャラコの布を竹竿に結びつけただけの簡単なもので行進の目印にすぎなかったという。パンジェールにいわせれば「この地方の黒人は、その旗に対して文明人のように名誉心をもつことはなく、その旗のために命を投ずるようなことは決してなかった」(p. 104) ということになる。

イ) サモリの生い立ちとサモリ帝国の形成

パンジェールは、サモリ帝国の形成史についてペロ中尉 (Peroz) が1887年、サモリと保護領条約 (批准されず) を締結した際に聴取したサモリ側の公式的な見解にもとづく報告^(注14)を、独自に収集した情報にもとづいて補正し、大要、次のように述べている。

パンジェールによれば、サモリ・トウレは1835年頃、現在のギニア共和国のカンカン市の南、約50キロメートルのところにあったピサンドウグ (Bissandougou) 村に生まれ、1860年までそこに住んでいた^(注15)。彼の父は、マンデ=ディウラ人^(注16)であり、マニニアン (Maninian) からワスル (Ouassoulou) 地方の諸市場にコーラの実を

運ぶ貧しい行商人であった。母はマリンケ人であった。この時代、この地方には周期的に戦争が起こり政情が不安定であったが、その戦争でサモリと彼の母親は捕えられ、捕虜としてモディウレドゥグ地方に送られる途中、ウオロコロ (Ouorocoro) でサモリだけが脱走に成功した。当時、ウオロコロ地方は高名なマラブ (marabout=イスラムの導師)、ソリ・イブラヒム (Sori Ibrahim) の支配下にあったが、サモリはこのソリ・イブラヒムに目をかけられ、イスラム教育を受けた (ペロ大尉によれば、サモリの母を捕えたのは、このソリ・イブラヒムであり、サモリは母の釈放を求めて、ソリ・イブラヒムに仕えることになったとされている。これはのちに、サモリがソリ・イブラヒムを攻撃することを間接的に正当化する理由となっている)。

ソリ・イブラヒムはその後、数回にわたりモディウレドゥグ、ガンクナ (Gankouna)、トウコロ (Toukoro) などに遠征を試みたが、その都度、サモリはきわだった活躍を示し、ソリ・イブラヒムは彼の功績に報いるため、若干名の奴隷を彼に与えた。しかし、ある日、些細なことからサモリは、イブラヒムの逆鱗にふれ、顔面を鞭で打たれるという事件がおきる。これを機に、サモリはイブラヒムの宮廷を去り、奴隷たちを連れて故郷のピサンドウグにもどった (1868年)。

ピサンドウグにもどったサモリは、首長ビティキエ・スアネ (Bitikié Souané) に直接つかえることはしなかった。ウオロコロから連れてきた奴隷を使って商業を営み、たちまちピサンドウグ村の有力者の1人にのしあがった。そして首長のスアネが死去したとき、サモリは当然のごとく首長の座におさまった。これが1870年から71年ぐらいいかけてのことであったという。

以後、サモリは破竹の勢いで勢力を拡大していく。まず1873年、ビティキエ・スアネの末裔で、ピサンドウグ村の近郊を支配していたファモドゥ (Famodou) がサモリに攻撃をしかけてくるが、これを撃退しファモドゥを捕え、村の広場で打ち首にする。この事件はサモリの勇名を周辺地域に高めることになり、サモリの力を恐れて周辺地域の村々はサモリに忠誠を誓うことになった。またそれまでソリ・イブラヒムの勢力圏にあったコモ (Komo)、トロング (Torong)、コニア (Koniam) なども、サモリの派遣した密使の策謀によって次々にイブラヒムから離脱し、サモリに忠誠を誓うことになった。サナンコロ (Sanancoro) だけが、サモリに屈服することを拒否し、イブラヒム側にとどまった。サモリはこの小さな町

に攻撃をかけ、6カ月かかってようやくこの町を占領した(1873年)。以後、この町はサモリ帝国の首都・牙城となった。

ソリ・イブラヒムは南部においてカバドゥグ(Kabougou)国と交戦中であったために、北部におけるこのようなサモリの勢力拡大の過程をなすがままにまかせていた。このことは、ソリ・イブラヒムがサモリと対決することを恐れているものと理解され、サモリの支持にまわる村々の数はさらに増加していった。

サモリ帝国の基礎を固める上で、決定的な意味をもったのは、北部におけるカンカン・モリ(Kankan Mory)、南部におけるソリ・イブラヒムと対決し、これを打倒したことであった。

カンカン・モリの父、カンカン・マフマドウ(Kankan Mahmadou)が、カンカンを中心に築き上げていた帝国は、彼の死によって崩壊の危機に頻していた。その息子、カンカン・モリは、サンカラン(Sankaran)との戦いにサモリの援護を要請する。サモリは、カンカン・モリと同盟して北方に勢力を拡大していくが、最後にはカンカン・モリの離反を理由にこれを制圧してしまう。カンカン陥落は1879年のことであった。

サナンコロがサモリに占領されてから4年目の1877年になって、ようやくソリ・イブラヒムはサモリに挑戦する。サモリが北方に遠征している機に乗じて、コニア地方の奪還をめざして自分の2人の息子の指揮する軍隊を派遣する。しかし彼らは敗退し、2人の息子はビスンドゥグで処刑される。1879年から80年にかけて再び、ソリ・イブラヒムはサモリがカンカン・モリと交戦中であることを利して南部から進撃するが再び敗退し、ソリ・イブラヒムは逮捕され、終身禁固の刑に処せられる。

カンカン・モリ、ソリ・イブラヒムを打倒したサモリは、この地域の支配権を独占するところとなり、1880年自らにエミール・エルムメニン(Emir El-Mouménin=信徒の指揮者)の称号を付した。

1880年代にいたり、サモリはますます勢力を拡大し、83年にはニジェール川を渡りバマコの南、わずか50キロメートルのシビ(Sibi)を占領し、バマコのフランス軍を脅かすようになる。このときは、オヤコ(Oyako)のマリゴ(marigot=未無し川)の戦場で、ボルニ・デボルデ(Borgnis-Desbordes)大佐の指揮するフランス軍に撃退される。しかし、1886年にはサモリ軍は再び北進し、フランスの支配下に入っていたニアガソラ(Niagassola)、キタ(Kita)を脅かす。ファルキ(Farki)、ンジンゴ

(Ndjingo)の戦場でサモリ軍は再び敗退し、サモリはフランスと和平を結ぶ意志を表明し、サモリの息子、ディオレ・カラモコ(Diaulé Karamokho)はフランスに招かれることになる。

カラモコがフランスから帰国した翌87年、サモリはバロ中尉との間に和平条約を締結し、ニジェール川の左岸(西岸)に存在するすべての権益をサモリは放棄し、ニジェール川の右岸(東岸)に存在するサモリの領土はすべてフランスの保護下におくことを承認した。

フランスとの関係が一応の落ち着きを見たサモリは、東北方向に向かってなお勢力を伸長し、ティエバと覇を競うことになる。1887年3月、サモリはティエバ征服のための遠征に出発する。ナチニアン(Natinian)を占領しシカソを包囲する。バンジェールは、このシカソを包囲する陣地においてサモリと会見することになったわけである。

結局、サモリはシカソ攻略に失敗し、1888年8月、18カ月にわたる戦場で大きな犠牲を払っただけで得るところなく、退却を余儀なくされる(pp. 146~150)。

(二) サモリ帝国の領土

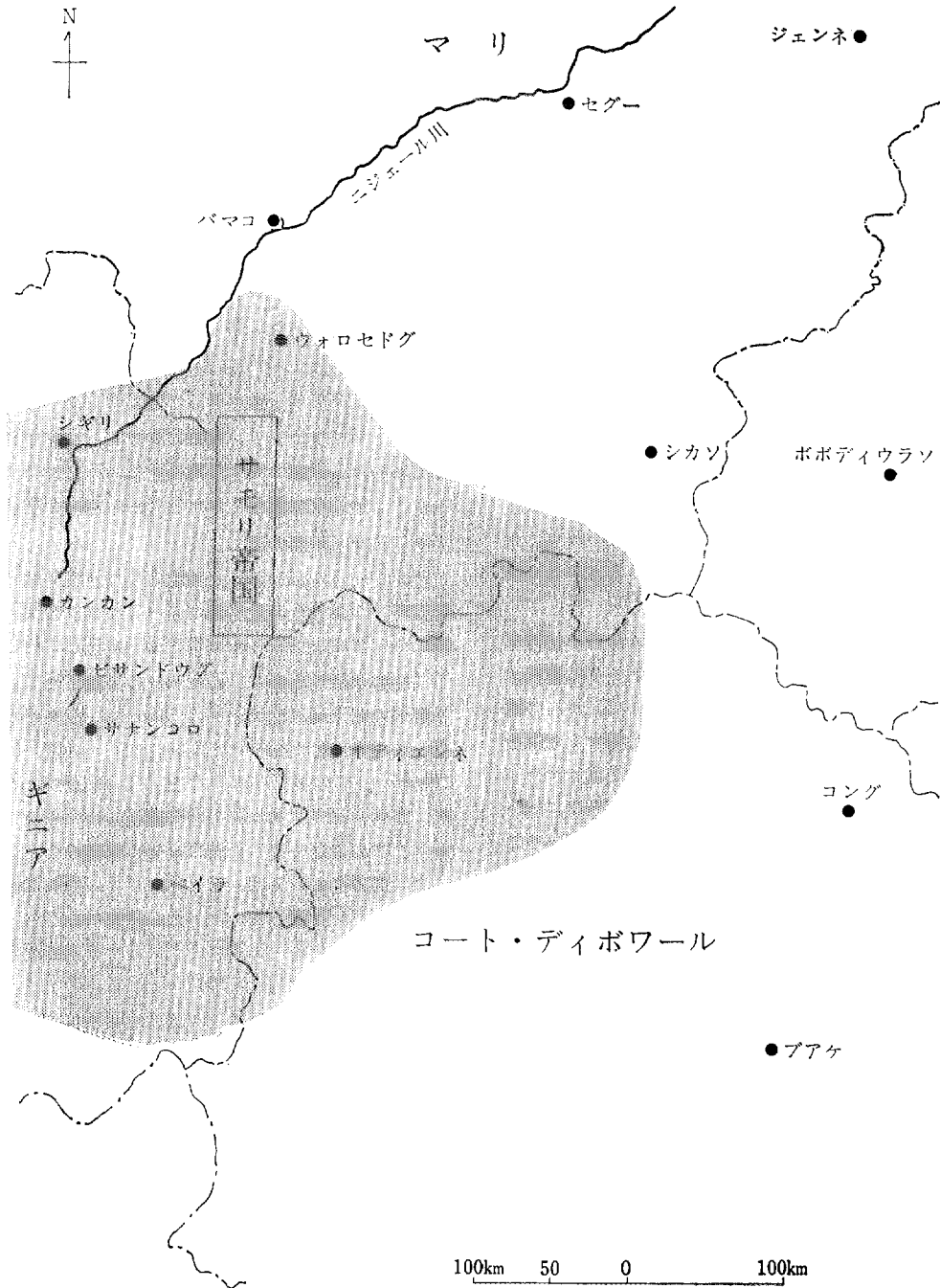
バンジェールがシカソの陣地にサモリを訪問した1887年当時、つまりその最盛期にあったサモリ帝国の支配領域についてバンジェールは次のように記している。

「1887年をはじめから、われわれの保護下に入ったサモリ帝国の領土は、北はマダネ(Madané)の支配するセグ(Ségou)国、東は当時・交戦中のティエバ国、カントリ(Kantli)、ニエネ(Niéné)などの小国(province)と接し、南はリベリア共和国の北部国境にいたるまで、ウオロドゥグおよび一連の小国群をその保護のもとにおいていた。西方においては、シエラ・レオンの英領植民地、仏領スーダンと接していた。その源流からバマコにいたるニジェール川が、仏領スーダレとサモリ帝国の自然の国境となっていた。」(p. 121)

バンジェールの推計によれば、サモリが直接、軍事的に占領していた領土の総面積は、16万平方キロメートルであり、これにサモリに服従した属領、保護領化した諸国の面積を加えれば、その面積は30万平方キロメートルにおよんでいた。

バンジェールは、サモリ帝国の領内を約400キロメートルにわたって踏査したが、その間に36の村と戦乱によって廃墟と化した36の廃村を通過した。36の村の人口は総計4200人で、人口規模別の村の分布は次のとおりであった。

第2図 サモリ帝国



人口	20人以下の村	4
	20～50人の村	17
	60～100人の村	5
	150～300人の村	7
	500～800人の村	3
	計	36

各村の間隔は平均約11キロメートルあったことを勘案して、バンジェールは4400平方キロメートル(400キロメートル×11キロメートル)の面積に4200人、すなわちこの地域の人口密度は、1平方キロメートル1人弱と推計した。地域差などその他の事情を勘案して、結局バンジェールは、サモリ帝国の人口を28万人と推計している。

サモリ軍は、シカソの陣地に6000人の兵力を投入していた(p. 97では5000人となっている)。その他の領内各地に3000人の兵士を駐屯させているとすれば、約30人に1人の割合で兵力として動員されていたことになる。この割合は、それまでの10年間、戦争を続けてきた国としては決して高いとはいえないが、住民の半分を占めるバンバラ系住民は、兵役に徴募されることはなかったし、スティギ(soutigui=家長)も兵役を免除されていたことを考えれば、この割合はヨーロッパ列強における総動員令に匹敵するものであったろうとバンジェールはみている(pp. 121～123)。

㊦ サモリ帝国の統治機構

サモリの統治方式はあらゆる意味で「専制的」であったとバンジェールは評価している。広大なイスラム帝国を建設しようとしたトゥクルール帝国のエル・ハジ・オマール(El-Hadj Omar)の場合と異なり、サモリはイスラム教を統治の原理としては採用しなかった。いくつかの村々には回教寺院が建てられ、また礼拝のための広場が設けられている村もあったが、礼拝が厳格に行なわれることはなかった。コーランの教理の中でサモリが採用した唯一のものは、ドロ(Dolo=とうもろこしなどを原料とする地酒)の飲酒を禁じたことである。これとて、とうもろこし、ミレット、ソルゴなど主要食料作物の穀類が醸造用に消費されることによって食料確保を危くすることを防ぐというきわめて現実的な要請にもとづく措置であったとバンジェールはみなしている。

サモリ支配下の各村には、ルガン(lougan)と呼ばれるサモリ用に確保された田畑が設けられた。村人たちは週に1、2度、定期的にこの農地の耕作にあたるのが義務づけられていた。その収穫物は数か村に一つ設けられていたサモリの穀倉に納められた。

各村にはドウグウクナシギ(dougoukunasigui)とよばれるサモリが中央から派遣した官吏が常駐し、地元の村の首長に対して、サモリの意向を代表していろいろと指示を与えた。サモリ用の田畑、ルガンの維持管理もドウグウクナシギの任務の一つであった。また市場のある村々では、サモリの勘定で諸物資を調達し、さらに重要な、ドウグウクナシギの任務として、地域住民の動静、もろもろの出来事に関する情報を収集しサモリに伝達するということがあった。

このような組織を通じて徴収される食料だけでは、サモリの王宮、軍隊・戦費をまかなうには不十分であり、不足分は侵略による掠奪に依拠せざるをえなかったとバンジェールは指摘している(pp. 33～34, pp. 150～151)。

(3) コング国

(イ) コング市到着

1887年9月30日、シカソのサモリの陣地をあとにしたバンジェールは、それから約5カ月の旅を続け、1888年2月20日、この踏査旅行の主要な目的地の一つであるコング(Kong)に到着した。

「ボルドー出発からちょうど1年目、私は、歓迎的でも敵対的でもなくただはじめてみるヨーロッパ人に好奇の目を注ぐ住民たちの中を、牛にまたがり質素な旅姿でコングに入城したのであった。家々(cases)の屋根、道路、四辻は、私を一目見ようと先を競う人びとで満ちあふれていた。道路や四辻に群がる人びとを首長(国王)の捕虜(=奴隷)である十数人の男たちが鞭をふるって追い払って道をあけてくれなかったら、私は小さな広場までたどりつくことができなかつたであろう。その広場で私の随員たちは止められた。

首長(=国王)の息子の1人がそこまでやってきて、私を首長の待つ中央広場まで案内してくれた。2本の大樹の木陰に、互いに向かいあって椅子に坐って待っていたのは、右側に国王(roi)カラモコ=ウレ・ワタラ(Karamokho-Oulé Ouattara)と左側にコング市長(chef de la ville de Kong)ディアラワリ・ワタラ(Diarawary Ouattara)であった。それぞれのまわりには、その友人や側近の人びとが坐っていた。それぞれ1000人ぐらいはいると思われるこれら二つの集団には沈黙が支配していた。すべての人びとがむしろや毛布の上に坐し、端正な身なりをしていた。

この歓迎儀式は、壮厳な雰囲気をかもしだしていた。そしてその雰囲気に集まった長老たちの白いひげをたくわえた黒い顔と、オリエント風の服装が調和していた…

…」(pp. 290~291)。

コング到着の翌日、バンジェールはコングの有力者たちの前で、彼の旅行の目的を説明するように求められる。

バンジェールは、フランスがすでにセネガル川とニジェール川を結ぶ通商ルートで活動しているフランス人商人を保護する目的でその地域にいくつかの軍事基地を建設したことを説明したのち、次のように言う。

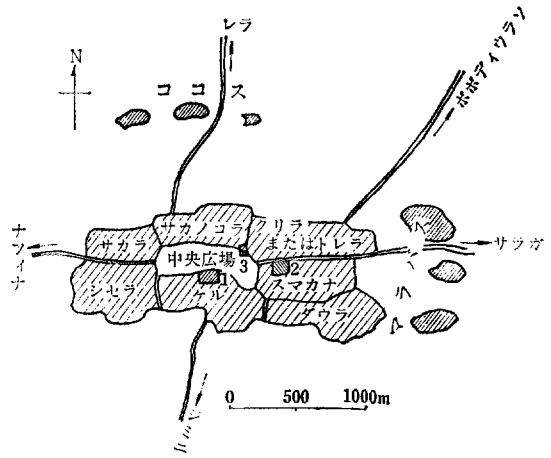
「すでにずっと以前から、フランス人はコングという都市の名を知っていた。われわれはまた、この土地がワタラー族(註17)によって統治されていること、住民は平和的でいまだかつて戦争を行なったことがないこと、彼らは活動的な商人であって、ニジェール川の彎曲部のあらゆる地域でヨーロッパ製品を吸収しているのは彼らであるということなどをすでに知っている。われわれの政府は、このようなコングの性格を知って、あなたがたと近密な関係をとり結ぶために使節を派遣しようと決定したのである。

私はまた、当地の住民に最も喜んでもらえるわれわれの国の産物、織細、武器、パールなどなどはどのようなものであるのか確める任務を帯びている。フランスに帰国したとき、われわれの業者たちにそのことを教え、それらの商品をニジェール川経由、あるいは沿岸経由で当地に送り込むことができるようにするためである。……」(pp. 291~282)

さらにバンジェールはこのあとに予定しているモシへの踏査旅行の計画の概要を説明したのち、最後に次のようにつけ加える。「われわれフランス人は、黒人の国ぐにを占領しようとしているのではない。あなたがたは、われわれが、奴隷を必要としないことをご存知であろう。またあなたがたはご存知であろう。数世紀以前からわれわれの船がわれわれの産物を積んでアフリカ沿岸にきており、その間いかなる意味でもわれわれは近隣の諸国を占領しようとはしなかったということ、しかしながらそれはわれわれの有する軍事力をもってすればきわめて容易なことであつたであろうということ。」(p. 292)

これに対して、国王カラモコ・ウレは次のように答える。「……われわれは、あなたの言ったことをすべて了解した。私はすべてのものを代表してあなたに感謝の意を表す。しかしながら、私の心の中に、なおさらあなたに言わねばならぬことがある。実はあなたについて悪い噂がひろまっている。人びとは、あなたがサモリの密使ではないかと疑っている。この点について、説明し

第 3 図 コング市略図



1. コング市長 ティアラワリの邸宅
2. コング国王 カラモコウレの邸宅
3. 大モスク

(出所) L. G. Binger, *Du Niger au Golfe de Guinée par le pays de Kong et le Mossi*, p. 294

てもらいたい。」(p. 292)

バンジェールは「シカソのサモリを訪問したのは、彼からサモリの支配地域を通過するための許可をとりつけることだけが目的であつたのであり、彼らから何の命令もうけていない」ことを説明し、疑いを晴らす。カラモコウレの説明でバンジェールは、自分のコング入国を容認すべきかどうかについて住民の中に論争があつたことを知る (pp. 288~293)。

このコング市にバンジェールは、3月12日まで20日間滞在している見聞し、それを記録に残している。以下にそのうち重要と思われる個所を選んで紹介しておこう。

(iv) コング市の景観

コングは、東から西へのびた大きな長方形の形をした城壁に囲まれていない開放的な町である。すべての住居は平屋根で土造りである。町の中心には市場の開かれる横500メートル、縦幅200メートルの大きな広場がある。この広場には5、6本の樹があるだけで十分な日かげがないので、多くの商人たちはわら小屋の屋台をつくり、大市の立つ日にはそこで商いをする。その小屋の中はなかなか快適で涼しい。

町はクバイラ (qbaila) と呼ばれる七つのブロックに

分かれていて、各クバイラはそれぞれそのブロックに住んでいる多数派のディム(Diamou=クラン?)の名を付して呼ぶ。たとえば、クバイラ・ダウラ(Daoura)は、ダウ族の人びとが住むクバイラの意味である(raは冠詞を表わす接尾語)。

これら七つのクバイラのほかに、町の中心部から田畑一つ隔てたところに行くつか小さな集落がある。それはいわゆる「廓外(faubourg)」である。北部のココス(Kokosou)部落は、クバイラ・サカラ(Sakhara)に属し、マラバス(Marrabassou)は、クバイラ・スマカナ(Soumakhana)に属している。

町の区画は規則的ではなく狭い小路が町の中を曲がりくねっている。羊、山羊・鶏がその小路をうろついている。少しでも小さな空地があるところは、機織小屋に占領されている。クバイラ・ダウラとマラバス部落には、四辻の小さな広場に、150ほどの藍染用の穴があり、強烈な臭気を発している。これらの穴は、深さ1.8~2.0メートル、直径1.2メートルのたて穴で、内壁は焼石灰を加えた火山灰、あるいはセメントの塗装で防水してある。町と廓外を隔てている農園には、ミレット、とうもろこし、たばこなどが植えられそれぞれ垣根でかこわれている。

コングには五つのモスク(回教寺院)があり、そのうち一つはミシリバ(Misiriba=大モスクの意)と呼ばれ、町全体に共通のものであり、中央広場にある(pp. 297~298)。

(イ) コングの住民

バンジェールの推計によれば、コング市の人口は1万5000、住民はマンデ=ディウラ人とその奴隷たちである。言語はマンデ語しか通用しない。このマンデ語は、バンジェールが精通していたバンバラ語にきわめて類似したものであった。

ほとんどすべての住民がイスラム教徒であり、彼らは三つの階層に分けられる。知職人層、指導者層を構成する識字イスラム教徒、文盲ではあるがコーランの戒律を厳格に遵守している人びと、そして第3に禁酒の戒律を破り、ドロ酒を飲用している名目的なイスラム教徒である。すべての階層のイスラム教徒が非常に寛容であり、フルベ族のイスラム教徒の場合のように不信心者には鍋やひょうたんも貸さないといったようなことはない。彼らは三つの主要な宗教について知っている。それらをムサ・シラ(Mouça Sila=モーゼの道)、インサ・シラ(Insa Sila=イエスの道)、モハムマドウ・シラ(Mohammadou

Sila=モハメッドの道)と呼んでいる。

コングのディウラ人の多くは、裕福な生活を送っている。彼らは自分の奴隷を廓外に住ませ田畑を耕作させそこから食糧を得る。これらの資源のほかに、自分の息子に2~3人の奴隷をつけて年に1、2度、ボボディウラソやジェンネあるいはもっと遠方まで行商の旅に出す。また毎年、当地にやってくるダフィナ(Dafina)の人びとから2~3頭の仔馬を買いそれを育てて2~3歳になったとき、ペゲ国(Peguè)、サモリ国、ティエバ国など戦争が続いている地方で売りに出す。自分の奴隷の一部を、織物や染物に従事させているものもいる。

町中で肉屋を営んでいる者もいる。彼らの羊は町中にいない。マラバス、ココスなど廓外で飼っていて、ほとんど毎日、新鮮な肉を妥当な価格で市民に提供している。1年の一時期を遠方の地で過ごすことを余儀なくされている小商人の妻たちは、夫の留守の間、コーラの実などを売って生活のたしにしている。貧しい人びとは、遠方にたき木を拾いに行き、それを市場で売っている。

町には理髪師もいる。住宅の間を回って歩き町角で顧客のひげ剃りをしている。フランスの場合と同じように、彼らは顧客の施しにその収入を依拠している。15分ぐらいで顔を剃らせて10~20コリ(3~6サンチーム、6~12円)。顔剃りが終わるとマッサージもある。ジンの空びんにつめたバーム油を水でうすめたものを、顧客の頭や頬に塗りこむ。

コングでは浣腸が流行している。多くの人びとが、浣腸器を携えて歩いているのをバンジェールは目撃している。それは山羊の皮でつくった小さな袋であり、その端のところにノズルの役目をする直径1センチの竹の切れ端がついている。アシャンティ族の場合と同じように、浣腸の調合にはピーマンを多量に入れる(pp. 298~300)。

(ロ) 教育

大市のたつ日の夕方、カラモコディン(karamokhodinn=学校の生徒)が2人ずつお祈りをとなえながら、それぞれ自分たちのクバイラの家々をまわり中庭まで入ってくる。彼らが現われると、いたるところで呼び声があがる。人びとは2コリ与えて彼らを追い払う。これは教育のための一種の税金である。彼らは集めたコリを教師のもとに届ける。教師は授業料としてそれを受けとり、一部は教材費にあてる(pp. 300~301)。

(ハ) 治安

警察の任務を果たすのはドウ(dou)である。バンジェールがコングに到着した日、鞭をふりむらがる群衆をか

きわけて道をあけてくれたのは、このドウであった。夜、10時を過ぎると彼らは町の中を巡回し、住宅の中から聞こえるそうぞうしい会話をだまらせ、しかるべき動機もなく町中をうろついている者は逮捕する。逮捕された者は中央広場に連行され、400コリの罰金を支払わなければ釈放されない。このドウという職名はもともとは「帰る」という意味で、彼らの任務が、人びとを自分の家に帰らせることにあったところからでている (p. 303)。

(v) 通貨

コングでは、貝貨 (cauries) が通用し、価格は次のように表示される。

1コリ	ケキエ (kékié)
2 "	ピゴ (pigo)
3 "	デイン・サバ (din-saba)
4 "	デイン・ナニ (din-nani)
5 "	デイン・ルル (din-loulou)
6 "	デイン・ウォロ (din-ouoro)
10 "	ポロコ (porokho)
20 "	トゴ (togo) またはムカン (moukhan)

20コリ以上100コリまでは10コリを意味するダバ (duba) またはダヴァ (duva) を頭につけて次のようにいう。

60コリ	ダバウォロ (dabaouoro——ouoro=6)
80コリ	ダヴァ・セギイ (dava-ségui——ségui=8)
100コリ	ダヴァラン (davaran) またはケメ (kémé)。シラ (sira 200) のあとではクル (kourou)
200	シラ (sira)
565	シラ・フラ・ニ・モコ・セギ・ニ・ディン・ルル (sira foula ni mokho ségui ni din-loulou=200×2 と 20×8 と 5 sira (200) とともに1単位となる20はモコ mokho という。)
300	シラ・キリ・ニ・クル (200と100)
8000	シラ・モコ・フラ (200×20×2)
12000	シラ・モコ・カバ (200×20×3)
20,000	シラ・ケメ (200×100)

などなどというようにシラ=200とモコ=20を単位として数える。ここではバンバラ語の基本単位であったバ (ba, 800), ケメ (kémé 80) の単位は使用されていない。

マンデ人は、独特でしかもきわめて巧妙な方法で貝貨を数える。地面にかかんで袋の中から貝貨を自分の前にひろげる。そして信じきたいほどの器用さで、それを5個ずつ取って200個(シラ・キリ)、の山をつくっていく。

そしてその山が10個になったところで、それらを一つによせ集めて、2000個の山(シラ・タン)をつくる。

金は、ミトカル (mitkhal) という単位で売られる。約4グラムである。1ミトカルは、貝貨で30シラ、すなわち6000コリである。したがって、金1グラムを3フランとすれば、1ミトカル12フラン、100コリは20サンチーム、シラ・キリ(200コリ)は40サンチームということになる。ロコ (lokho, 金細工師) は必要があると5フラン金貨を2500~3000コリ(5~6フランに相当する)で買う。金は蓄蔵されあまり流通しない。銀は全く流通していない (pp. 307~309)。

(h) コーラの実

コーラの実(マンデ語ではウル)はスーダン地方では貴重な奢侈品の一つであり、そのことによって重要な取引の対象となっていた。コングにおいてもコーラの実はいずれも主要交易品の一つであった。

スーダン人にとってのコーラの実は、フランス人にとってのコーヒーと同じようなものであるとバンジュールは言う。スーダン人にとってコーラの実は薬である。睡眠薬であって覚醒剤でもある。飢え、かわきをいやし、食欲を増進させる。すぐれた精力剤でもあるという。要するに万能薬である。バンジュール自身は、下痢どめとして効能があったと書いているが、それ以上に贈物としてのコーラの実是非常に喜ばれて対人関係において非常に役に立ったということである。

コーラの木は、野生で西海岸一帯、北緯10度ぐらいまでのところに分布している。しかし、豊富に実をつけるものは、6°~7°30'の地帯に存在している。

コーラの実はいくつかの種類に大別されるが、後者が前者に比して価格が高い。コーラの採取期は、2月、6月、10月と年3回あるが、2月にとれたものはいたみが早い。6月、10月に採取したのもでも、最高50~60日間しかもたない。

産地のグルマニア (Groumania) では、1ウル・フィエ (ourou-fié=コーラ用のひょうたん200個入り) の価格は200コリである。それが、コングではその大きさによって1個、2~12コリで売られている。このコーラの実はいずれも、貝貨とひきかえに売られるが、その貝貨によってコングの商人たちは綿花、藍、赤ピーマンなどを買う。

バンジュールは、コーラの実の商いに従事している小商人の1夫婦の稼ぎがどのくらいになるかそれをつぎのように試算している。小間物、鉄製品、布地など地元の価格で20フラン相当の商品をもってた一組の夫婦は、

キンタンポ (Kintanpo) またはボンドウク (Bondoukou) まで赴き、携行した品を売り、5000個のコーラの実を仕入れる。それをボボ・ディウラッソまで運びそこで売り、塩塊を2本買うことができる。彼はそのうち1本半をコングに持ち帰り、残りの半分で上産の品や帰路の食料を買う。コングからキンタンポ、キンタンポからボボ・ディウラッソまで行き、そこからコングに帰る行程は、約100日間を要する。コングへもち帰った1本半の塩塊は240フランで売れる。したがってこの夫婦は、220フラン、すなわち1日当たり2フラン20、1人1日当たり1フラン10だけ稼いだことになる。

しかし、これらの人びとがこの100日間、どのような生活を送るのかについても考慮する必要がある。彼らは3~40キログラムの荷を各自、頭にのせて1日の大部分を歩いて暮らす。一つの宿営地に到着すると食料を挽き、たき木を集め、水を探す。その夫婦に子供がいれば、婦人はその子を背中に背負って歩く。突然、おそわれる雨にも耐えて歩きつづける。

このような生活に耐えて1年間、妻とともに働いて、奴隷1人を買うことが彼らの最高の目標である。奴隷は労働のもっともよき補助者である。彼は、主人たちと同じような生活をする (pp. 309~315)。

(f) 塩

コングの市場で取引きされている商品で、コーラの実について重要なのは塩である。コングで売られている塩は、タオデニ (Taodéni) の岩塩鉱から、エル・アルアン (El'Arrouan), トンブクトウ (Tombouctou) 経由で当地に入ってくるもので、パマコに入ってくるティシト (Tichit), セブカ・ディジール (Sebka d'Idjil), バクヌ (Bakhounou) などの地方で産出する岩塩より細かく色も白い。また一塊の大きさも大きい。そのほかに、グラン・パッサム、英領黄金海岸でとれる海塩も売られている (pp. 315~316)。

(g) その他の商品

コングの商人たちは、南部でとれるコーラの実を、ジェンネまで運び北部で産出する塩・羊毛製のブルヌ (burnous=アラブ風の頭巾付外套) と交換してくることを主要な役割としているわけであるが、その他に彼らは次のような商品もジェンネの市場に送りこんでいた。

1) コング特産の紅白の布地、細い帯状におられた布地を、12~15本、パーニュ用に縫いあわせたもの。婦人用パーニュの高級品とされている。コングで1枚8000~1万5000コリ (16~30フラン) する。

2) 赤ピーマン——ニエレ、フォロナ (Follona), レラ (Léra) 地方の産物。

3) ニアマク (niamakou), こしょうの一種で、ジェンネやトンブクトウで珍重される。ジミニ, アノ, ゴトゴ, ボンドウクなど南部の諸地方に産する。

4) 金

コングから、ジェンネにもちこまれる砂金はごくわずかである。コングの商人の手中にある砂金の大部分は、ロビ (Lobi) からくる。

コングの市場は、これらの商品を取引きする商人たちが、毎日、夕方になると1000人ぐらい集まってきて賑う。5日ごとに開かれる大市となると、まさに祭りのような賑わいを呈する。市場は、モコロコ (mokolokho=男の市) とよばれる北側の部分と、ムソコ (moussoke=女の市) とよばれる南側の部分に分かれている。北側のモコロコ (男の市) では、布地・毛布、銃、帽子、鏡、パール、針などと銅製皿、サラダ鉢、さらしキャラコ、ネックチーフ、などのヨーロッパ製品を売っている。南側のムソコ (女の市) では、食料品、香辛料、綿花、藍、果実、焚木、などが取引きされる (pp. 316~318)。

(x) コングの歴史

コングはジェンネ (1043~44) と同じ時期に建設されたこの地ではいわれているが、アラブの歴史書にコングの名は全く出てこないところから、それはかなり疑わしいのではないかとパンジェールはみている。

この地方にマンデ=ディウラ人が到来してきたとき、コングはすでに存在していたが、とるにたらない一つの集落にすぎなかったという。マンデ=ディウラ人は、原住民からそこに定着する許可を得られず、テネングラ (Ténenguéla) と、パンジェールが訪れた時期にはすでに消滅してしまっていたリンバラ (Limballa) とよばれる小さな村 (現在のコング市から2~3キロメートルの地点) に定着した。

コングのマンデ=ディウラ人は、異なった二つの方向からこの他に流入してきた。ワタラ (Ouattara), ダウ (Daou), バル (Barou), ケル (Kérou), トウレ (Touré) などの一族の人びとは、北部のセグ、ジェンネから移入してきた。他方、シセ (Sissé), サカ (Sakha), カマタ (Kamata), ダニオコ (Daniokho), クルバリ (Kouroubari), ティミイテ (Timité), トラウレ (Traoulé), それにワタラ族の一分枝は、テングレラーゴコ (Tengréla-Ngokho) 地方、とりわけウオロドゥグからテングレラに向かう道に沿って存在する諸村の出身者であった。

彼らは、一時期に大量に移入してくる一般的にいう移民とは異なり、フルベ (Foulbé) 人の場合と同じように、小さな集団をなして、少しずつ移入してきた。そして原住民よりも一般に活動的で知的であり、イスラム教徒であった彼らは、この地方で優越的な地位を占めるにいたった。

クルバリー族は、リンバラ村を建設した。北部から移入してきたワタラー族は、テネングラ、カマレ (Kamaré), ボゴマドウグ (Bogomadougou) に定着した。

この地方で真に実権を獲得した最初のマンデ=ディウラ人は、ファティエバ・ワタラ (Fatiéba Ouattara) であり、それを継承したのがバギ・ワタラ (Bagui Ouattara) である。それがさらにセク・ワタラ (Sékou Ouattara) に継承される。このセク・ワタラがバンジェールが訪問した1888年当時の国王、カラモコ=ウレ・ワタラの祖父にあたる。

セクの時代に、クルバリー族はコングに住居を設けることに成功したが、町全体を支配するまでにはいたらなかった。市の開かれたある日、すでに市内に居を構えていたクルバリー族と共謀して、テネングラのワタラー族とその同盟者、バル、ダウ族は、コングに攻め入り、ファラファラ (Falafalla) 人の首長らを虐殺し、この町の支配権を掌握した。これが18世紀末の頃のことであったという。

セクの死後、彼の12人の息子たちは権力を分掌し、コングを中心に四方に小集団をなして移住し拠点を建設していった。

(4) 国王カラモコ=ウレ・ワタラ

彼は、すでに述べたようにセクの孫にあたる。すでに40年間、王位にあった。彼の皮膚の色は、純粋のプール人のように明るいことから、ウレ (oulé=赤) という綽名がついた。彼は中背で、みごとに白髪を口ひげをたくわえていた。

彼は、各地に散在しているセクの子孫たちの領土を含めたコング国の長であり、ジェムマア (djemmâa=長老会議) の議長である。彼は、自分の一族が略奪を行ったり、戦争を行なうことがないように監督している。マンデ=ディウラ人は、好戦的ではなく、コングの軍隊は、コモノ (Komono), ドコジエ (Dokhosié), ロビ (lobi) などの地方出身者の傭兵である。カラモコ=ウレ自身の親衛隊としては、コングに50人ぐらいの兵しかもっていない。彼らは、主に各地方との連絡のための伝令の役割を果たしている。

(5) 移住

マンデ・ディウラ人が戦争を忌避してきたとするならば、彼らはどのような手段で自らの勢力を拡大してきたのか。それについてバンジェールはつぎのように説明している。

コングでは、過剰になった人びとを彼らが保持しないと考える通商路沿いに移住させる。商人たちを異教徒による掠奪から守り、通商路の安全を確保するためである。こうしてまず、コングからボボ・ディウラノにいたるルートに沿って散在する村々に、ディウラ人は住みついていった。つづいて、ジェンネまでのルートに沿って、各村に1ないし2家族ぐらいつつ住まわせていった。それに50年の年月をかけている。

これらの移入民はその村に住みつくると、学校を組織し、原住民の子供たちの教育をはじめ原住民との接触を深めていく。そして彼らはコングとの関係、他方の商業中心地との関係を利用して、原住民に助力を与え、次第に彼らの信頼を深めていく。ついには彼らの種々の問題に直接介入するまでになる。何か調整すべき問題がおきるとディウラ人のもとに持ちこまれるようになる。彼は、読み書きを知っている知識人として、同時に商業を営む資産家として原住民の信頼を得る。このディウラ人は、自分が問題を解決しえないときは、原住民の首長に対してコングの人びとの助力を仰ぐべきであると進言する。このようにしてその村は、コング国の保護下に入っていくことになる。

(6) イスラム教・カースト

コングの宗教的首長は、シタファ・サカノコ (Sitafa Sakhanokho) であるが、彼は何ら政治的な役割は担っていない。いわば教育大臣というべき存在で、20校ぐらい存在するアラビア語学校を統轄している。彼自身は、成人・老人たち向けの講義を行なう。すべての長老たちはシタファが週に2~3回行なうコーラン、福音書、モーゼの5書に関する講演に必ず出席する。教育は非常に普及しており、文盲は少ない。彼らの昔くアラビア語は、純粋のアラビア語である。バンジェールが滞在した時点では、メッカ巡礼を経験したイスラム教徒は1人も存在しなかった。20年に1人、メッカ巡礼を行なうものがでるかでないかという程度であるという。

マンデ=ディウラ人は知的で、活動的であるとバンジェールはいう。イスラム教に対しても決して狂信的ではない。カーストの精神はコングではほとんど消滅している。したがってマンデ=ディウラ人の中には1人のグリオ

(griot)も存在しない。バンジェールが訪問した他の地域では、耕作者、兵士でないものは、劣等の蔑視される一つのカーストをかたちづけていたが、コングではそのようなことはなく、すべての人びとが織物・染物に従事していた。

(注1) ポンディシェリ (Pondichery) とシャンデルナゴール (Chandernagor) 特産の藍染めの綿布。

(注2) G・P・マードックによれば、ソモノは広くはバンバラ族に含められる漁業を専門とする1カーストとされている (Murdock, G. P., *Africa, its peoples and their culture history*, Mc Graw-Hill Book Co., New York, 1959, p. 71)。バンバラは総じて Pagan であるが、ソモノはイスラム化していた。

(注3) 1886年フランスで小麦粉が100キログラム当り卸売価格で31.85フランであった。

(注4) アルマミとは、おそらくウラマ (ulama イスラム教の導士) がなまった尊称であると思われる。バンジェールは、サモリのこともアルマミと呼んでいる。

(注5) 綿のだぶだぶした上衣。

(注6) 宮廷歌手、楽師のカースト。

(注7) セ (Cé) とはカリテ (karité) アフリカ産果樹、学名 *Bassia Parkii* のことで、この樹からとった油。

(注8) サハラ砂漠に近い北部の岩塩の産地。

(注9) 意味不明。

(注10) 30キログラムのまらがいかな？。

(注11) 村の首長の名と思われる。

(注12) 赤阪賢一氏は、マンデング帝国と呼んでいる (『アフリカ社会の地域性』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 昭和48年 144ページ)。ここでは、バンジェールの「Etats de Samory」という表現を「サモリ帝国」と訳しておく。

(注13) 6000としている個所もある。

(注14) Peroz, *Au Soudan Français*, Paris, 1882.

(注15) Peroz 中尉によれば、サモリの出生地は、のちにサモリ帝国の首都となったサナンコロ (Sanancoro) となっている。フランスの西アフリカ史研究者 Yves Person は、サモリの系図を伝承を通じて再構成した論文の中で、サモリの生地は、マニャンバラドウグ (Manyambaladougou) であるとしている。Y. Person "Les Ancêtres de Samory," *Cahiers d'Etudes Africaines*, Vol. 4 No. 13, 1963.

(注16) 同じく Yves Person は、サモリの父方の系譜をマンデ=ディオラとするのは間違い、あるいは不正確であると述べている。ディオラは商人という職業を表わす言葉で、族名としては、マリンケ=モリ (Malinké-Mory) と呼ぶのが正確であるとしている。マリンケ・モリとは、マリンケ族のうち、とくにイスラム化し、もっぱら商業活動に従事している人びとを指す (Peroz, *op. cit.*, p. 126).

(注17) このワタラという名は、マリンケ=モリ (族) に属するクランあるいはリネッジの名と考えてよいと思われるが、ここでは漠然と「一族」と訳しておく。

おわりに

以上、バンジェールの『西アフリカ紀行』第1巻の中から、ごく一部の内容を紹介したにすぎないが、そこには当時の西アフリカの状況を理解する上にきわめて貴重な具体的事実に関する情報が豊富に含まれていることが知られよう。それらは、私たちの中に存在する枠組としてのアフリカの伝統的社会的イメージに、生き生きとした内容を、あるときはその枠組をつきくずしてしまうような質の情報を提供してくれる。またそこから多くの興味ある社会経済史的問題もひきだすことができる。

バンジェールの叙述の各所に出てくる捕虜 (=奴隷) の社会的性格、コングのディオラ人による商業活動、この時期にサモリ帝国が形成されたことの意義、などなど。それらの問題に対する回答を、この旅行記から直接ひきだすことはできないことはいうまでもないが、そのような問題視角から、この時代の西アフリカ社会を再構成しようとするとき、きわめて貴重な資料となることは間違いないだろう。

(調査研究部)